

刑事弁護をめぐる理論と実務の叡智がここに集結!!

実務体系 現代の刑事弁護



1 弁護人の役割

A5判・434頁・定価 本体4,500円+税

2 刑事弁護の現代的課題

A5判・472頁・定価 本体4,500円+税

編著：後藤 昭 高野 隆 岡 慎一

本書の特色

- ◆刑事弁護の実務を再構築し、弁護士自らが考え実践するための指針を提示。
- ◆捜査弁護、公判前手続、公判及び証拠法の各分野で、最新の立法と実務運用の中で浮上してきた問題点につき、実践的対処法を論じています。
- ◆日本の刑事弁護をリードする弁護士・研究者が執筆!!

お試し読み、お申し込みはコチラ

<クレジットカードでもお支払いいただけます>



第一法規

検索

CLICK!

第1部 弁護人役割論の座標軸

- 第1章 弁護人の存在意義 (後藤昭)
- 第2章 弁護人の義務論 (浦功)
- 第3章 依頼者の意思と専門家裁量 (笠井治)
- 第4章 弁護人の訴訟法上の地位 (加藤克佳)
- 第5章 犯罪者の更生への弁護人の関わり方—弁護士は、依頼者の更生に関われるか? 関わるべきか?— (石塚伸一)
- 第6章 弁護活動の限界 (岡慎一・神山啓史)

第2部 刑事弁護の倫理

- 第7章 刑事弁護における利益相反 (小坂井久)
- 第8章 共同被告人の弁護人間の倫理 (下村忠利・高山巖)
- 第9章 刑事弁護士と守秘義務 (中山博之)
- 第10章 虚偽証拠禁止の意味—職務基本規程75条の意味、被告人の虚偽主張への対応等— (上田國廣)
- 第11章 身体拘束中の被疑者・被告人との接見、書類・物の授受 (葛野尋之)
- 第12章 証拠の取扱い—開示証拠を中心に— (森下弘)
- 第13章 依頼者(被告人)の意思と上訴 (船木誠一郎)
- 第14章 被害者との対応 (村木一郎)
- 第15章 報道への対応—取材への対応方法、マスコミを利用することから生じる問題— (弘中惇一郎)
- 第16章 刑事弁護と懲戒制度 (水谷規男)
- 第17章 弁護士依頼権をめぐる検察官倫理 (指宿信)
- 第18章 被害者参加と弁護士倫理—被害者を代理する弁護士について— (池田綾子)

第3部 刑事弁護の基盤—刑事弁護を支えるもの—

- 第19章 刑事弁護の教育 (神田安積)
- 第20章 刑事弁護の担い手 (武士俣敦)
- 第21章 弁護の質の保証 (村岡啓一)
- 第22章 日本における国選弁護制度のあり方について (山口健一)
- 第23章 接見交通権 (田淵浩二)
- 事項索引
- 判例索引

第1部 捜査弁護

- 第1章 被疑者・被告人の身体拘束をいかに回避するか (前田裕司)
- 第2章 取調べにどう対処するか (坂根真也)
- 第3章 刑事施設における弁護側専門家の面会等について (金岡繁裕)
- 第4章 一般接見に関する弁護活動 (和田恵)
- 第5章 訴追裁量と弁護活動 (谷口太規)

第2部 公判前手続

- 第6章 公判前整理手続に付されない事件の弁護活動 (菅野亮)
- 第7章 証拠開示の現状と課題 (斎藤司)
- 第8章 「争点整理」と刑事弁護のあり方 (宮村啓太)
- 第9章 死刑事件の弁護 (後藤貞人)
- 第10章 裁判員選任手続の現状と課題 (西村健)

第3部 公判

- 第11章 被告人の着席位置、服装 (青木和子)
- 第12章 手続二分の可能性と弁護実践 (四宮啓)
- 第13章 審判「公開」を巡る諸問題 (萩原猛)
- 第14章 裁判官と裁判員の役割分担 (宮村啓太)
- 第15章 裁判員裁判に対する上訴 (大橋君平)
- 第16章 被害者参加と無罪推定 (奥村回)

第4部 証拠法

- 第17章 厳格な証明と自由な証明 (後藤昭)
- 第18章 同一性・真正の証明 (高野隆)
- 第19章 「必要性」判断から「許容性」判断への一元化へ (角田雄彦)
- 第20章 自己矛盾調書の証人への提示・朗読 (高見秀一)
- 第21章 鑑定から専門家証言へ (趙誠峰)
- 第22章 検察官調書(刑訴法321条1項2号)をどうするか (伊藤睦)
- 第23章 自白の任意性立証にどう対処するか (秋田真志)
- 第24章 証明基準 (河津博史)
- 事項索引
- 判例索引